Japan Geoscience Union Meeting 2011
(May 22-27 2011 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2011. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

HRE032-04 会場:203 時間:5 月 22 日 17:15-17:30

木炭生産にみる自然資源利用
Use of natural resources in traditional charcoal production

西城 潔 [1*]
KIYOSHI SAIJO[1*]

[1] 宮城教育大学
[1]Miyagi University of Education

本研究では、日本の丘陵地の薪炭林において、自然資源がどのように利用されてきたのかを考察する。事例として検討するのは、仙台近郊の丘陵地における過去（動力導入以前）の木炭生産である。木炭生産には炭焼きのための窯（以下、炭窯）が必要である。そのため、まず最初に丘陵地内の適地に炭窯が築かれる。炭窯の適地としての条件はいくつかあるが、地形的には遷緩線（上方に位置する急斜面と、下方の緩斜面との傾斜変換部）上が選ばれることが多い。これは、以下に述べる集木や炭焼き作業の利便性を考慮してのことである。炭窯の材料として用いられるのは、周辺斜面の表層から得られる礫や砂質粘土である。炭窯完成後は、炭窯より上方に分布する樹木が伐採され、伐採された木（炭材）は斜面を滑らせることで炭窯周辺に集められる（集木）。集められた炭材は、炭窯内で数日間焼かれて木炭となり、その後搬出される。炭窯が遷緩線上に作られるのは、集木から木炭搬出までの作業にとって、窯の上方に急斜面が、また下方には緩斜面が位置していることが好都合だからである。以上の一連の作業過程を検討すると、丘陵地における木炭生産では、炭材という植物資源のみならず、微地形・表層地質などが資源的に利用されていたことがわかる。

キーワード: 薪炭林, 自然資源, 丘陵地
Keywords: fuelwood forest, natural resources, hilly area